

---

# ゆらぎころ

星乃杏奈

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ゆらぎこころ

### 【Nコード】

N4766F

### 【作者名】

星乃杏奈

### 【あらすじ】

必ずどんなに努力しても最後は彼氏の「浮気」で終わってしまう主人公。いつもの様に同僚兼男友達に自分の浮気相手として彼の前に立つてもらうと約束した。しかし、自分の頼みごとが原因で運命は180度変わってしまう。

## 少しの思いと小さな心（前書き）

楽しんで頂けたらなによりです

## 少しの思いと小さな心

「よし決まった」

私は化粧室の鏡を前にして、携帯を思いっきり閉じた  
鏡に映るのはいつも代り映えのしない自分だが、これから気が重い  
事を行わなくてはいけなくなってしまったのだ

ここは町の中心部にあるオフィス街のど真ん中

私は大学時代の友達と会社を立ち上げて今に至っていたりする  
昔は数人だった仲間達も年々増え、それと比例する様に売り上げも  
結構上がっている

今日私のテンションが一気に下がった問題はそこではない

むしろ会社や仕事に関係ない私生活の部分で大きな問題を抱えてる

「今日はちょっと顔色さえないみたいだな」

オフィスに戻るといきなり声をかけられた

正直誰にも今は会いたくないのよっとも思いつつ話かけられたのだ  
から返事をしない訳にもいかない

「そうかなー」

そっちはお昼外で食べないの」

「まあな、ちょっと急ぎがあるからコンビニで」

疲れた顔で私にコンビニの袋をかけた

テンション急降下中に声をかけている厄介者は、仲間で会社を立ち  
上げたからもちろん大学時代の友達

繊細な顔立ちからは想像できない男気っぷりで社内で人気だったりする

そんな事を知ってか知らずか結構とつかえひつかえ遊んでるみたいと噂なんだよね

まあ、そこら辺りは個人の自由だから詳しく本人に聞いたりなんかしなけど

でも、実は彼とは高校時代からだから一番信用できる仲

「手を動かしながら、私の話聞いてね」

うん、いいよと器用にパンを食べながら彼はこっちを向いた

「早瀬、この間言ってたけど日曜暇だったよね」

確かに暇だけと言いたそうに大きく頷いた

「じゃあ、私の野暮な用事に付き合ってくれるよね」

「暇だけど彼氏がいるだろ花には

その自慢の彼氏に付き合ってもらえば話は早くないか」

食事と仕事で忙しいみたいだけど間髪いれずに言葉が返ってくる

「いるよ、今時点では

でも解消しようと思って日曜日に」

「またか・・・」

私の言葉にかなり驚いたのか咥えていたパンを思わずパソコンのキーボードに落していた



## 少しの思いと小さな心（後書き）

真面目に連載するのは初めてだった

まあ、気楽に更新していくので

よければ感想・アドバイスを頂けたらなと思っています

## ポタージュ（前書き）

一気にUPします



## ポタージュ

お昼私が化粧室で目にした携帯の中身は要するに世間一般に言う『浮気現場』という物だった

お節介な知り合いがわざわざ写真で報告してくれたのだ

彼氏のふらふらした優柔不断な態度は優しすぎる人と一応は解釈してたけど、

あからさまな浮気のシーンを見せつけられたら今までの気持ちが吹っ飛んでいった

見た瞬間はそうだったんだよ、そうだったんだけど……  
だけど、時間が経てば経つほど気持ちが落ちていく

「で、俺がまた花に協力しなきゃいけないのか」

彼が驚いてパンを落としたのはここに理由があった

普通は、いくら友達の別れだけじゃパンを落としたりはしない私の多くない恋愛遍歴を辿っていくと過半数は相手の浮気で終わりをつけている恋が殆ど

そんな私は天に誓っても相手を裏切る浮気なんかしないんだからと思っただけ

「たぶん彼氏には相手がいるし、やっぱり悔しいもん別に嫌がる事なんか一つもしてこなかったのに」

元彼も、そのまた元彼もとたてつづいての最長記録を更新しているこの頃

もうこれは「魔のトライアングル」としか言い表せないだろう

「今回は部屋に荷物置いてたから、そっちの回収も手伝ってね」

「もう相手と話し合うつて機会もたなくていいのか」

そうやって聞いてくるけど、もう写真みた時点で自信無くしたんだもん

もう一向にも早く付き合っていた過去を消し去りたいって思いでいっぱい

午後の仕事が無かったら今から飛んでも荷物を片づけたい

他にこんな事を頼れる男友達はいなくて結局いつもお世話になっていまう

「じゃあ、今度一杯おごつてもらうからな」

「傷心につけこんでお金もぎどろつとしてるの？」

「で、もし別れがゴタついて俺に被害が及んだ場合は上乘せ請求させて頂きます」

まだ、こんな冗談言えるから私大丈夫なのかな…？

## ポタージュ（後書き）

ご覧になって下さり有難うございました

人は必ず揺れる（前書き）

これまたUP

## 人は必ず揺れる

「ねほりはほり詳しく聞くつもりはいけど、同棲してた訳？」

お昼ご飯が終わってぱらぱらと帰ってくる人が多くなった中で  
ポツンと彼がつぶやいた

人が多いわけじゃないから、そんなに気にしなくてもいいんだけど

「どっ、同棲っていうか何て言うか微妙な感じなんだけど  
しいて言うなら半同棲的な感じかな」

出会ってかなり早くビビってきたから、これが最後の恋だと思って  
凄く力入れてたのに

「今日6時に、親父のバーで」

「は？」

少し意外な答えが返ってきた

「今回はいつもより傷痕深そうだし、聞いてやるよ  
親父は美味しいワイン探しかでイタリアだから」

「いいよ、早瀬も色々あるだろうし」

そりゃ誰かにぶちまけたい気持ちはあるけど、そこまでお世話にな

るのは気が引ける  
お言葉に乗りたい気持ちもあるけど

「その顔がな、けっこう話聞いてやらなきゃって思わすんだよ」

「別に泣いてないし、大丈夫だよ  
午後からも頑張るんだから」

「しっかりしろよ  
もう少ししたら大口のクライアントの打ち合わせ」

プライベートを仕事に持ちこむって事は私が決めたルールでは一番  
してはいけない事  
周りにも気を遣わせちゃうし、空気が悪くなって他の人の仕事にも  
影響しちゃうから  
そう自分を責めるとまた一段と気持ちが落ちてきた

ああ、辛いけど午後に頑張らなきゃ  
気分転換に自動販売機へと向かった

人は必ず揺れる（後書き）

同じです

# ワインは心の薬（前書き）

## 4 話目



## ワインは心の薬

「花も毎回懲りないよな」

くじ運が悪いというか、何と表現したらいいのか」

「そんな事言わないでよ」

出会った時とか付き合いだした時とか、そういう兆候一切無かったんだから」

かなりハイペースに飲み干す私のワイングラスにコポコポと新しいワインをつぐ

そう、結局早瀬のお父さんが経営しているバーへ来てしまったのだ  
お酒とおつまみがタダって言葉に妙に惹かれてしまって  
というか、最後早瀬との仕事だったから半強制的に連れてこられちゃった

「もう、ワイン注ぎ過ぎだよ」

「明日土曜だし大丈夫だろ」

また飲んだ先からコポコポとワイングラスに赤い液体が私に注がれる  
何だかお酒の力で心が軽くなった気がする

早瀬に連れてきてもらって良かったかもしれない

横にいる本人には照れくさくて言えないけど心の中で思わず呟いた

「でも、今分かってよかっただろ」

少しの沈黙の後ワイングラスに満たされているワインをクルクル回しながら彼は言った

今までの雰囲気と打って違う感覚が私に伝わる

「人事だから言えるのよ

もう私なんかのキャリアになるとね」

少しの間軽い沈黙が続く

「それ俺は違うと思う

そりゃ、浮気した相手が一方的に悪いけどさ」

「何よ」

「お互いこれで分かっただろ

他にお互いもっと合う相手がいることを」

お酒で思考能力が鈍ってるのかな  
いつもなら即反論してるのに

「じゃあ、合う人って何よ

私は相手に合う様に十分向き合ってきたつもりなのよ」

「それは肩張りすぎ

お互い毎日そんな事してたら疲れるだろ」

妙に説得力のある話を口にチーズを運びながら聞いた

「で、そっちは彼女どうしてんの？」

「別れた」

「ふーん、お互い様ね」

私は飲んでいたグラスを彼のグラスへカチンと当てた

「俺は浮気されてじゃないんで」

「厭味ったらし」

こうして金曜の夜が更けていく

## ワインは心の薬（後書き）

次もできるだけ早く更新します

私と朝日とストロベリー（前書き）

今日も更新します！

## 私と朝日とストロベリー

「う、まぶしい」

朝日の光の眩しさに負けて、私は眼を覚ました  
自分の部屋じゃない天井…

「えっと、ここ家じゃない  
ったー痛くて頭割れそう」

自分の部屋じゃない天井を見て思わずテンパって起き上がってしう  
もう、ここは何処私は誰状態に加え二日酔いで頭が真っ白

「やっと起きたんだな  
朝飯出来てるから食べるよ」

ひょこつと早瀬が現われて来た  
とっという事は。。。。

「えっとー」

痛い頭を抱えつつ冷静に考えると、この部屋早瀬の家に似ているよ  
うな

お酒のせいで記憶が飛んじやてっるんだ私

「俺もちよつと飲ませ過ぎたって反省したんだけどさ」

何か嫌な予感がする

慌てて衣服を確認すると、よかつた昨日と変わってない

まあ、お気に入りのスーツが皺くちゃになってるのは自分に非があるからしょうがない

「俺が信用できなかった訳ですか？」

「いや、そんな事ないんだけど記憶が無いけど  
昨日お酒のんでから一切記憶が無くなっちゃってて」

セーフって事だろう

一安心したところで油断したのか頭痛がまた激しさを増した様な気がした

「薬と水持ってきてやるから」

「ありがとうー」

うつ、早瀬が行った後から吐き気も来ている様な  
お酒弱いから次の日こうなるの分かったのに、飲ませすぎた早瀬を恨んだ

ブー・ブー

音に気がつき何だろうと手を伸ばすと、コツつと携帯が手に当たった  
ブラックだから私のじゃない

「ねー、携帯鳴ってるよ」

大きい声を出したら頭に響く

「誰か携帯開いて見て」

「分かった」

多分女だろうね

少し遠慮しつつも私は彼の携帯を開いた

携帯の着信には意外や意外お母さんからであつた



私と朝日とストロベリー（後書き）

有難うございました

薬と地獄（前書き）

＊

## 薬と地獄

「春子おばちゃんから電話だよー」

こんな時間に電話なんて、薬はいいから出なよ」

何だろうなと、早瀬が駆け寄ってきた

私が携帯を差し出すと不思議そうに彼は電話口に出る

会話が続いている中、もちろん二日酔い中の私にとっては地獄  
吐き気はくるは頭痛はあるはで、座っていられず思わず布団に入り  
こんでしまった

あー、早く電話終わらないかな

早瀬の家を出てドラッグストアは駆け込めば解決するんだけど  
今の私は、その体力も気力もない  
そう頭で考えてる内に電話は終わっていたみたいだった

「花ごめん、これから母さん迎えに行ってくる

今日旅行から帰ってきたんだと

俺全然知らなかったんだけど、父さんイタリア行ってるし  
家まで送るあしがないんだよ

薬はコレおいておくから、水は自分でくんで」

「えっ、ちょっと」

早瀬はジャケットを羽織ってあれよあれよという間に飛び出てしまっ  
た

問題はこれからだった

薬は飲めるわけだけど、とうぶんここから動けられないだろう

春子おばちゃんが、もしここにやって来ると少し大変な事になる  
というか実家を巻きこんでの大きな騒動に発展してしまう  
背中に冷たい汗が流れる

「これはダメだ」

薬を水で押し込んで私はゆっくり帰りじたくを始めた  
急激に動くこれまた頭にくるので、動きが制限されちゃうんだよ  
ね、

鞆…鞆…私の鞆はどこにあるのかなー

早瀬に聞いた方が早いけど、やつは運転中だろうし

刻々と時間は過ぎていく…

駅から近いから来るんだろうな春子おばちゃん

私はため息をつきながら、もう一度鞆探しを再開することにした

## 薬と地獄（後書き）

久々に更新再開しました  
まあ、気長に見てください

忘れものと浮気（前書き）

\*

## 忘れものと浮気

「鞆もあつたし、忘れ物も確認したし」

とにかく春子おばちゃんに遭遇しない様にと、それだけに集中していた

危惧してる事もそうなんだけど、お母さんに筒抜けになっちゃうからね…

で、早瀬にお世話になったとなると堪ったもんじゃないの

私は、急いで玄関へと向かった

「痛いし、パンプスは履けないし最悪」

急いでいる時こそ焦りで物事が進まなかったりする

普段なら、すっと履けるパンプスまでもクラッチの所で手こずるぶつちぎって走りたいって気持ちもあるけど、結構高かったし

くく

そんなイライラしている時に携帯が鳴る

早瀬が友達からかと思つて携帯をポケットから出し目を向けると

「げ、恭介からだ」

まあ、今時点は彼氏からの電話

こっちは諦めで別れた気満々だったけど話明日だったんだ

出たくない、あー出たくない

お前は暇なのかもしれないけど、私今忙しいの！

無視を決め込んで再度パンプスに挑戦

でも、中々着信が切れる気配がない

明日の事もあるし、しょうがない出てやるかと携帯の通話ボタンを押した

「もしもし、何ですか」

「あのさ、何で昨日帰ってこなかったの  
電話も出ないしさ」

恭介の口調はやや強みがかったけども、今の私にはそんなものは正直おかまいなし  
あと片方のパンプスのクラッチを止めなきゃいけないんだし

「帰ってこなかったって、そっちは出張だったんでしょ」

「電話繋がったと思えば、勝手に切られるし」

あー、早瀬が無理やりプチプチ切ってたんだ  
どうりで着信のお知らせもないし

「あー、ちょっと抜け出せなかったから  
ちようど仕事の山だったし」

「今、会社にいるの？  
いたらさ迎えに行こうと思って」

「へ、今日はいいよ家帰ってるし」

「そっか、ならいいんだけどさ」



電話を終えた後少し放心状態になってしまった  
もちろん、この恋は昨日終止符を打ったつもり  
全然恭介は、私の事もう興味ないと思ってたのに

何だかこの件面倒になる様な香りが、ぷくと漂ってきた様な

## 忘れものと浮気（後書き）

今回も更新しました！

見て下っている方はいかな（、；、；）  
と内心不安ですが、、

おちゃめなおもちや

「おーい、寝てなくて大丈夫なのか」

はっと顔を上げると早瀬の姿がそこにあった  
と、いうことは…

「はい、花ちゃんお久しぶりね

お土産を今日届けようと思ってたから

まだ居てくれてよかったわー」

もはやゲームオーバー

やっぱり危惧していた通り、早瀬の後には春子おばちゃんが満面の  
笑みで顔を覗かせていた

別に春子おばちゃんが嫌いな訳じゃないけど、

帰りたい・・帰りたい・・帰りたい・・と頭の中で言葉が舞う

「ね、久し振りに花ちゃんに会うから嬉しくなって

お兄ちゃんにね、無理やりケーキ屋さんに寄ってもらって紅茶と  
ケーキ買ってきたのよ

ここ寒いしリビングでお茶しましょ」

春子おばちゃんはお土産類を全部早瀬に持たせて、一人上機嫌にリ  
ビングへ向かっていつていた  
相変わらず強引で元気なご様子

「二日酔いの所ごめんな

花が居るって言ったら、一人盛り上がったちゃって

って、そんな睨むなよ」

「ここに居るっていうのがお母さんにバレたら困るのよ」

「まあまあ、これで貸し借りなしって事で」

ちよっと待つてと言う間もなく、荷物が重すぎると彼もまた行ってしまった

つくづく今日はついてない本当に

「花ちゃん、紅茶冷めちゃうから早く来てちょうだい」

「はい、今行きます」

しかたない会ったからには覚悟を決めなくちゃ

「花ちゃんが好きなケーキ屋さんで買ったのよ  
遠くてそれで、ここに来るのが遅くなっちゃただけど  
私は余り物でいいから二人とも好きな物とりなさい」

嬉しそうな春子おばちゃん見てると罪悪感まで感じてしまう私  
さっきまで、おばちゃん避けようとしてただけど  
ここまで喜んでくれるんだったらねー

「おばちゃんが先にどうぞ、私こそ余り物で大丈夫だから」

いいのよーっというながら、早瀬の家でいつもしてくれている様に  
お皿にモンブランを分けてくれた

「うふふ、うふふ」

じーっと、私と早瀬を交互に見る春子おばちゃん

「おばちゃん、あのね

「いいのよ言わなくて、私には分かるものー  
やっとお兄ちゃんも落ち着いてくれるのかなって思うと嬉しくて」

あー、やっぱり来てしまった

何でこう人生ついてないんだろう

## おちゃめなおもちや（後書き）

長い間期間を空けての更新がやっと出来ました

私は書きながらストーリーを作る派なので、すらすら思っ日もあれば出来ない日もあり、  
時間をかけた割には…です

先日は感想を有難うございました  
書こうという気力がまた戻ってきました

## 午後のごまかし

「家にいつも帰ってくる時違う香りただよわせてたからそれはやっぱり男性としては、最悪でしょ  
顔だけは確かによく生んであげただけどねー」

そう言っておばさんは、紅茶をすすった

確かに、春子おばちゃんのいうお通りよ  
面倒見がよくて友達思いなのは確かだけど

顔から見て繊細と思ったら大間違い、大雑把中の大雑把  
仕事でもプライベートでも細々した所は殆ど押しつけてくるし  
とにかく顔に似合わずの私の人生の中での性悪男ナンバーワンのお  
墨付きを贈呈できるくらい

で、早瀬に視線を向けると早々に席をはずしやがっているという  
大体早瀬の仕事の内容は把握しているから、急ぎの仕事はないはず  
なのに  
まるで関係ないかの様に真面目そうにパソコンの前に座りやがって  
完璧に逃げやがった

「そうそう、今日パパがイタリアへ仲間とワインの買い付けいっ  
ちやったから寂しかったりするのよ」

「彩香ちゃん、お泊りとかで家いないの？」

早瀬の家は彼と妹の彩香ちゃんとの二人兄弟  
確か彩香ちゃんは私よりも3つ下で可愛いの

顔は早瀬家に生まれたからには芸能人ばりは当たり前なんだけど、  
どこかの誰かさんと比べて性格もいいからねー

弟しかない私にとって本当の妹みたいな存在だったりする

「やっぱり二人だけだったら、夕飯も作りがいが無いじゃない  
それに彩香が花ちゃんに会いたいつて最近煩いし  
遠慮しなくてもいいのよー」

「はあ」

毎回だけど、この春子おばちゃんの押しには私弱いんだよね

「それに、パパが家用に卸してくれてる美味しいワインもあるし  
未成年組もいなくなった事でみんなでお酒飲みましょう  
亮と二人でいらっしやい」

「本当に春子おばちゃん疲れてないの？」

「少々国内旅行行ってきた所で、パパと一緒に行ったヨーロッパ  
周とは比べ物にならないわ」

ねーいいでしょ、と勢いで言われたらもうYESと返事するしかない

「と決まったら、まあこんな時間  
久しぶりにお兄ちゃんも花ちゃんも来てくれるんなら  
張り切って腕によりをかけてお料理しなくちゃ」

昨日の今日でまたお酒とは、胃が重たい  
一向に早瀬は助け舟も出してくれないし  
ああ、またややこしくなっちゃった



恭介の事もあるというのに、この週末思すぎるよ

## 午後のごまかし（後書き）

更新の手違いで消えてしまって、ショックと思いながらやっと書き終える事ができました

## 眠りからの魔法

帰りの挨拶も簡単に済ませ、春子おばちゃんは自宅へと帰っていった

「はやせー、ちょっと巻きこまないでよ」

確かに久しぶりに、彩華ちゃんには会いたい気はしなくもなけど春子おばちゃんは、名前同様に一年中春みたい人だから変な勘違いされちゃったのは、確実

「母さんが勝手にした事だから、俺も被害者俺だつて散々花に巻き込まれてますが」

あー言えば、こー言ってくる口の減らない奴最後には見合いが当分断われるとか、喜ぶなんて

「この話春子おばちゃんの所で止まると思う？  
私のお母さんの所へ話しは筒抜けになっちゃうじゃん」

「そうだろうね」

「あのね、私は恭介の事だつてまだ残ってるわけこれ以上複雑な事は抱えたくないの」

「だろうね」

さつきから聞いていれば、分かっているのか分かってないのか朝起きて二日酔いだった私は最悪な気分が最骨頂に達していた

「いいの、もう逃げられなくなっちゃうのよ?」

「俺は逃げようとか考えてないけど」

「もう話す気がつせた

今度こそ帰るから、時間になったら向かえにきて」

早瀬は、いったい何を考えているのか私には一切分からない  
話をしてると頭がまた疼いてくる

今日の事は行きたくないけど、約束をしたからにはスッポカスのも  
無理で

というかスッポカス勇気がなくて

「車で送ろうか」

「いいです、ごあいにく電車で帰りますから」

鞆を手にとり、もう冷め切った紅茶を一気飲みして私は早瀬の家を  
出た

春子おばちゃんに、かなりの量の紅茶を勧められて飲んだからお腹  
は水樽の様

今にも、ぼちゃぼちゃいつている



## 眠りからの魔法（後書き）

あまり自信はありませんが……

## 残り思い心の中に

「ちょっと、知らないうちに時間が経っちゃった」

気づけば5時

早瀬の家から帰ってきた途端、やっぱり薬だけじゃ体が持たなかったみたいで

倒れる様にベッドに倒れこんで寝ていたみたい

早瀬家の夕ご飯は大体6時半くらいだから、そろそろ迎えにくる頃だ

その前にシャワー浴びないと

着替えを手に持った瞬間、玄関のチャイムが鳴った

「早瀬いくら暇でも、ちょっと早すぎでしょ」

そう言って早瀬だと思い私はドアに手をかけた

「早瀬って誰なんだよ」

しかし、そこにいるのは早瀬ではなく望んでいない訪問者だった

「きょうすけ」

来ると思っていなかったなので、私の頭の中は真っ白

「来るなら、連絡してくれればいいのに」

「連絡したさ、何回も  
携帯確認してみれば分かるだろ」

電話と同じく恭介は少しどころか、かなり強張っていた

「寒いしさ、とろあえず中に入れて」

「えっ」

このまま恭介を部屋に通すと、今までの決意が曖昧に流される様な気がした

もう私は恭介に思いはないはず、ないはずなんだけど  
彼を見つめていると今までの思いが走馬灯の様に込みあげてきて微妙な感情が湧いてくる

「ほら、花入らせろよ」

「急な用事じゃなかったの、用件は何」

「用件とか、俺を入れてくれないわけかよ」

この時一瞬だけど、今まで見たことのない恭介が私の前にいた

「だから用件はって聞いてるでしょ」

「入れろつつてんだろ」

目の前に居る人は完璧に、私の知っている恭介ではない  
今まで、こんな大きな声で怒鳴るなんて1回もなかった  
大らかがトレードマークな人だったのに、そう思うと膝ががくがく



震えてくる

「最近、俺の所に帰ってこないし

俺が携帯かけてやっても通じないしさ、舐めてるわけ？」

もう怖くてしかたない

チエーンをとかなければ良かったんだけど、早瀬と思ったらばっかりに  
恭介が思いつきりドアを引けば、、、

全部思いとおりになってしまう

助けて早瀬

こういう所に来てくれないと、約束したんだから

## お日様のない日

「手こずらすじゃねーよ」

現実はその甘くなく、私は結局力負けで恭介を家に入れてしまった。

恭介の意外な一面と、こうなるはずでは無かったという事で頭が真っ白

私はきちんと彼に真正面から向き合って恋愛してきたつもりだったけど私が見てきた恭介は、あくまで彼の『外面の一部』にすぎなかったという事なのだろう

目の前にいる男は理解していた、人が良くて優柔不断な人間じゃない

「でさ、何で昨日電話でなかった訳？」

「電話の事は話したでしょ」

そう答えると、恭介はむっとした様だった

独特の緊迫した空気が部屋に流れる

このまま恭介の思うがままには絶対になりたくない  
あまり奥にはいかなない様にと私は小さな抵抗を試みた

浮気をした恭介が私を責める真意がいまいち掴めないでいる

恭介自身が「浮気」をして私を裏切ったじゃない

これが属にいう独占欲ってものなんだろうか

「下の名前を呼んでる男の声が聞こえた

お前のところは兄貴なんかいないだろ」

早瀬のやつ、助けに来る所かややこしくさせてるじゃん  
意外な所でトラブルは起こっていたみたい

「痛い、痛いから恭介」

私が、はっきりと答える事が出来なかった事に腹を立てたのだろう  
恭介は私の腕をきつく持ち壁に強く押し付けた  
腕をつかむ手は、どんどん痛みが強くなる

「お前が、疑わしい事してるからだろ  
答えられないって事は肯定してるんだろ」

「別に、肯定してる訳じゃないでしょ」

出口が見えないお互いの会話

カチカチと時計は早瀬家で行われる食事会が迫っていると刻んでいる

「私は予定があるの」

恭介には悪いけど、明日きちんと話合おうよ  
私も丁度、恭介に話たい事があったから」

もう、らちがあかないと思い私は恭介を思いっきり睨んだ  
煮え切らない変な気持が、もやもやと行ったり来たり

「俺は今日聞きたいわけ  
疑わしいって思いが、お前の言う通りなければさ  
今でもかまわないだろ」

「もう、いいかげんにしてよ」

とにかく一緒に空間にいたくなくて、私は恭介の腕をありったけの力で振り払い

私の家なはずなのに飛び出してしまった

## お日様のない日（後書き）

UPするのが遅くなりました。

感想ありがとうございます

こんな駄文に評価をして頂いて嬉しいかぎりです

## 火と油のその先に

「あー、自分の家なはずなのに出てきちゃった」

衝動的な行動を起こした事を反省しつつ、

家から出た後トボトボと一直線に伸びている廊下を下向きかげんに歩く

恭介が危険人物となった今、部屋に一人残すのは嫌なんだけどでも恭介しか居ない部屋に帰ると、間違えなく前以上になる事に違いないだろう

お金をとられたら？

色々ある重要な書類を見られたら？

キッチンにある早瀬との写真を見られたら、絶対に何か起こるだろう

53

どうして早瀬との写真をキッチンに飾っているかというと

春子おばちゃんの趣味で写真楯を作ったらしく、早瀬と私の2ショットの写真つきでマンションに送ってきたから

飾らないでいるのも、春子おばちゃんに悪いし

早瀬との写真を差し替えればよかったんだけど、面倒で結局そのままに

恭介は私の家に来てもキッチンには入らないから、こっそり移動させていた

戻らない訳にはいかない

恭介の事だつて、いくら恭介が猫被っていたとしても

私は大人なんだし、自己責任

戻らなきゃいけないんだ、帰らなきゃ自分の家に

「おい、花その格好は・・・」

振り返ると、さっきまで来てと望んでいた早瀬の姿があった  
眠たかったから、ブラウスにジャージ  
寒いだろといいながら、自分が着ていたパーカーを私にかけてくれ  
両肩を掴まれた

やっぱ、こういう所は優しかったりするんだ早瀬は

「彼氏が来てる

ちよつと、今回も男運悪かったみたいだね

自分の家なのに飛び出しちゃった」

「優しくて優柔不断がとりえとか言ってたんじゃ」

早瀬の大きな目が更に大きくなった事を感じた

そつよ、私だつて恭介がそんな性格だつて今まで知らなかったんだし  
早瀬が爆弾を落としたにもかかわらず、遅すぎなのよ

「そついう時は、女一人じゃ対処できないだろ  
約束したんだし俺呼べよ」

「呼べるわけないでしょ

乱暴に部屋に入ってくるやいなや、壁に押し付けられて  
腕思いつきり掴まれて、動けなかったんだから」

ほらと腕を早瀬に見せると、少し青痣が出来ていた

「で、男はまだ花の家に居る訳か」

「うん、でも、」

恭介の様子だったら、かなり興奮していた  
だから、もしかしたら早瀬に何か起こるかもしれない

「乗っかった船だし

それに早く片付けて行かないと、時間ないし」

「ちょ、ちょっと待って

私の制止も聞かず、早瀬は私の部屋へと向かっていった



## 火と油のその先に（後書き）

今日はできるところまでUPするつもりです

もも色やじろべい

「どうも、はじめまして」

私を挟んで、早瀬と恭介の妙な空気が流れる

どうにか穏便に話が進めがいいんだけど、内心私はひやひやしていた

「君か、やっと出てきた

噂には聞いてたけど、やっぱり後ろに男がいたんだな」

「後ろに男なんて、私はそんな事」

恭介は薄々早瀬の事を知っていたみたいだった

後ろに男と言われるなんて、驚いてしまう

でも、私は神様に誓って早瀬と関係持った事はない

「お前を紹介してもらった時に言われてたんだよ  
後ろに男がいるから、俺が勝つか負けるかって」

「え」

恭介の言っている意味が、いまいち分からなかった  
どうして、そこで早瀬の話が出てくるのか

「すごいよなお前

二人を手玉にとって俺を笑ってたんだろ」

少なくとも私は恭介に一生懸命だったんだよ

手玉にとるとかって、恋愛ってそんな物じゃにのに  
私はそんな器用な人間じゃないのに

恭介から出てくる一言一言が、今までの私を否定してる様で悲しくて耳を塞ぎたくなった

ぽたぽたと涙が床に跡をつける

私は、恭介と別れることが寂しくてとかじゃない

少なくとも一時期本気で愛した人だと思うと悲しくてしかたなかった

「花は風呂入れ」

今まで傍観していた早瀬が、空気を打ち消す様に口を開いた  
やっぱり人の事って思ってるからだろう、一人だけスタンスの違う彼  
を見て拍子ぬけしてしまう

重い空気にも負けないマイペースぶりはご健在ってところ

「へ？」

「このまま話してもお互い出口見えない様だし  
簡単に言えば、二人ともに壊れた関係を戻す意思も見えないんだ  
ろ」

恭介は、どう思っているんだろ

気持ちはやっぱり浮気相手にいつてるのかな

それとも、、、

もう終わったのに、終わった事なのに

もし、普通に明日恭介と話せていたら

こんな事恭介から聞かなくてよかったのかな



## もも色やじろべい（後書き）

お久しぶりです

最近身の回りが忙しくて中々更新できませんでした……

## シャボン玉

あれから無理やりバスルームに押し込まれて、気がつけば恭介の姿はもう部屋には無かった

「恭介…、帰ったんだ」

部屋の空気が、がらつと変わる

これで全てが終わったと思うと、最後は苦味の効いた別れ方だったけど寂しく感じた

落ちついたからかな、今なら冷静に考えて恭介に腹が立ってきた私は、あんたみたいに道徳に反して浮気なんかしてない

それなのに、最終的に私が悪女みたいな扱い方されて終わるなんて

「むかつく」

勢いにまかせて近くにあったミネラルウォーターを口にした

「花さ、俺のせいでごめんな」

別に早瀬が謝る事じゃないのに

私とは目も合わせ様とはしない早瀬

「俺さ、出過ぎたマネし過ぎた

ちよつとした知り合いの知り合いだったからさ

花には知らないふりして」

正直その言葉にはビックリした。  
という事は紹介する以前から面識はないにしても早瀬は恭介のこと知ってたんだ

「それは、早瀬の優しさだったんでしょ」

さーっと、夕方の香りのする風が窓から吹き抜ける  
もう、今は冷静なれてるから

「まあ、人は噂にはよらにとか思ってたんだけど」

さっきまで、普通に話せてたのに今の私と早瀬には重い沈黙が流れる

「知ってて見守ってくれたんでしょ

まあ、今どうこう言ってもね」

「花、、、」

「ずっと浮気って相手が悪いって思ってた

でも、違っかなーって今回の事で感じてきちゃってシャワー浴びて確信して

私は、自分って物を押しつけてしまってただけかもしれない

今まで恭介が押さえてくれてたのも奇跡で」

誰よりも幼くて、誰よりも世間を知らなかった私が全部招いた事  
「安い女」に、今私はなってるのかなーって思う  
もちろん口にはプライドが邪魔して言えないけど  
もっと早く気がつけばよかったのかな

「時間でしょ、すぐ準備するから待ってて」

もともと竹を割った様なさっぱりした性格ではない私は、揺れる力  
ー テンの裾を掴んだ



## シャボン玉（後書き）

ずいぶん時間が空いてしまいましたか…  
結末も見えてきた事ですし、どんどん更新していきます

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4766f/>

---

ゆらぎころ

2010年10月10日21時16分発行